

三方五湖の魚類

福井県海浜自然センター 渡 智美

三方五湖の恵み

バシヤン、……バシヤン、……、漁師さんが、長さ5mほどもある竹竿を思いっきり振りかざし水面をたたくと、まるでおぼけのように大きなコイやフナが網にかかります。これが三方五湖の恵みかあ～！想像を超える光景を目の前に、ただただびっくりするばかりでした。



三方湖のたたき網漁

雪がちらちら舞う寒い冬が、たたき網漁の季節です。たたき網漁は、5つある湖のうちの一つ、三方湖に古くから伝わる伝統漁法です。冬、三方湖の水温は5度近くまで下がります。魚たちは動けなくなり、湖底で春が来るのをじ～っと静かに待ちます。そんな魚たちの習性を利用したのが、たたき網漁です。湖底でじ～っとしていた魚たちは、水面をたたき「バシヤン」という大きな音と振動にびっくりして飛び出します。そして、その飛び出してきたところを、刺し網で捕まえるというわけです。

なんでも、大きなものでは、昭和53年12月8日に体長110cm、重さ23kgの大ゴイがかかったこともあるそうです。人間に例えると、小学校1年生くらいの子供さんと同じくらいの大きさだということです。こんなに大きな生き物を育む湖の力って、本当にすごいですね～。

5つの湖

そして、さらに、この恵みが湖ごとに異なること、それが三方五湖の大きな魅力ではないでしょうか。三方湖には、ハス川をはじめいくつかの川が流れ込んでいます。また、そのいくつかの川には、

周辺の田んぼからの用水が流れ込んでいます。三方湖に流れ込んだ水は、水月湖、菅湖、久々子湖を経て、海へと流れていきます。日向湖は、通常、他の湖とはつながっていませんが、海とつながっています。5つの湖はそれぞれ、海水の影響をどの程度受けるかによって塩分濃度が異なるため、湖によってみられる魚種が異なることが特徴です。三方湖ではコイやフナ、水月湖とその隣の菅湖ではワカサギやシラウオ、久々子湖ではシジミが主に漁獲され、日向湖ではマダイやブリなど海水魚の畜養が営まれています。三方五湖には、淡水や汽水、海水に生息する魚、海と湖を行き来する魚や湖と川を行き来する魚、そして湖とその周辺に広がる田んぼを行き来する魚など、本当にいろいろな魚たちがすんでいます。海・湖・川・水路・田んぼ、三方五湖を中心とした「水」でつながる多様な環境が、たくさんの魚たちを育ててくれるんですね。

湖が育んだ魚たち

それだけではありません。三方五湖は、な、な、なんと！すごい魚たちを育んだのです。すごい魚とは、いったいどんな魚なのでしょう？

ハスは小魚が大好物。泳ぐ力がとても強く、広い湖の中をびゅんびゅん泳ぎ回り、餌になる小魚を・・・パクッ、への字に曲がった大きな口で一度捕まえると放しません。ハスは、コイの仲間ですから、コイ科の魚の中では唯一の魚食性だといえます。

また、日本でハスが自然分布していたのは、琵琶湖と三方五湖だけだといわれています。そして、近年の研究において、両湖のハスは形態的、遺伝的に



ハス

差があることがわかってきました。ですから、三方五湖のハスは、日本中を探しても、ここにしかいない！ということになります。

タモロコは、田んぼの水路など比較的流れのゆるやかな場所でよくみられる魚です。ですが、三方五



タモロコ

湖のタモロコは、ちょっと一味違います。他のタモロコと比べて、体がスマートでなんだか口が上を向いています。これは、湖の環境に合わせて、体が進化していったためだといわれています。



ナガブナ

ナガブナについては、全国的にみても生息地が大変少なく、どのような生活を送っているのか、ほとんどわかっていないようです。

三方五湖にすむこれらの魚たちは、分布域が大変限られていることから、分布上重要魚種といわれています。今回のラムサール条約登録も、そのことが評価されました。

では、三方五湖にこのような魚たちがすんでいるのは、どうしてでしょうか？それは、湖の歴史と深い関係があるようです。三方五湖の原型が誕生したのは、今から約50万年前だといわれています。大変古い湖です。

例えば、ハスは、鳥浜貝塚からみつかっています。鳥浜の縄文人は、1万2千年前～5千年前まで生活していたということですから、その頃には、もうすでにハスが湖にすんでいたことになります。そして、ゆっくりと長い時間をかけて、三方五湖の環境に適応していったのだらうと思われます。

また、果てしなく長い時間をかけて、地域の自然環境と共に歩んできた魚たちは、地域の自然があるべき姿であるか、健全な状態であるかをみる目安、指標であるともいえます。

守りたい・伝えたい・地域の自然

このように、豊かな恵みと地域に特徴的な魚たちを育んでくれた三方五湖ですが、残念ながらその様子は、時代と共に変化してきました。湖の治水事業が進み、農業技術や生活水準が向上するにつれ、湖岸のコンクリート化や湖と周辺の水辺とのつながりの分断化、水質の悪化というような環境の急激な変化が起こり、それとともに、湖にすむ魚たちの姿



湖岸のコンクリート化

も、そして、人と自然が共にいきる姿、人と自然のにぎわいもみられなくなってきました。そんな中、産卵のため湖から田んぼに遡上してきたフナを泥んこになって追いかけたり、また、産卵のために黒い波となって押し寄せるハスを捕まえる、小さな漁師「未来を担う子供たち」の姿が、湖周辺から消えかけています。

さらに近年では、外来魚の侵入が追い打ちをかけています。

地域の自然を目の前にして、もう一度、何が大切なのか、私たちはどのような未来を描きたいのか、そのために何をしたらよいのかを考える時期に来ているのだと思います。まずは、一緒にできることからやってみませんか？

ラムサール条約登録により、三方五湖は世界的に重要だと認められました。この登録により、三方五湖や湖にすむ魚たちを好きになって下さる方がいっぱいになるといいなあと思っています。好きなものって、大切にしたいし、きっとそこから生まれる優しい心が、人と自然のにぎわいを取り戻す大きな力になると信じているからです。



未来を担う子供たち

(写真提供 長谷川 巖)